

ますので今更らに不運なる戦友を憫れみ吊い乍ら久方振りには御上陸。二隻のボートは大きな石をくもりつけて流失を防ぎ扱て今後
の御協議でまいます。
何は扱て置いての目下の第一急務は人家を探し出して飲食にあ
りつき腹力をつける事であるが、何気なく上陸して見ると一寸人
家とてもなきやうなれば、山田兵曹は三四人と共に海岸を廻はり
て人家を尋ね見よ、自分には之れから島の内地に踏み入りて林の方
を探険し見んと、協議は忽ち一決して齋藤大尉は八人連れ山田兵
曹は四名と共に右と左りに立ち別れになりました、島奥の森の
方に行かれたる齋藤大尉の一行は暫時すると行手の森の中から煙
が立ち上ほりて居るのを發見せられました、煙のあがる所を見ら
れると人家とてはないが、
「オイ、確乎せんか、オイ、イ〜」

と呼ぶ日本人の聲が聞へます。益々訝りて行つて見らるゝと不
思議も不思議十が十迄死んだに相違なしと思つた南洋大機關士と
土屋機關兵とが二人して死かけて居る青木機關兵を頼りに介抱し
て居らるゝ處で、餘りと云へば餘りの奇遇に其時の御一同の喜び
は到底筆や言葉には盡し切れませぬ次第であります。之れに氣
を得てか青木の病勢も頗る快復したので夫れでは差し當り人家の
有無を山田兵曹の方に聞き合はさんと約束の集会所短艇繋留場
使者を立てられると、暫時経つて息せき切りての報告に海岸には
靴の足痕が澤山ありて短艇は二艘ながら無ひと云ふ。夫れでは露
助の奴輩が嗅ぎつけ来たか又は其短艇を掠奪して持ち行きたのか
兎に角夜に入りたれば暫時眠むりて山田の通知を待つ事にせんと
議は一決、皆が疲れ切つて居らるゝのでゴロリ〜と恰も死人の
如くお眠りに成りました。
有繁は齋藤大尉、身は指揮官として皆の責任を一身に集めて居

られますから如何しても眠り切れずウツラ／＼として居られる
と、夜も次第々々に更け／＼て草木も眠むるてう廿五日の午前零
時過ぎ靴の足音が下の方から近寄りて参りますので、齋藤大尉は
ソツと頭をあげ聞かすかし見入りて居られますと、ピカリと光
りてズドンとうち放したるは正しく拳銃。齋藤大尉はカッパと
ねあがりて、
「皆起きろ、注文通りの死時が来たぞ。」
と叫び立てらるゝ聲聞きつけて、今拳銃をウチ放したる方より
は、

「オヤッ……、齋藤大尉殿じやムいませんか……」
と又た／＼不思議な大奇遇に一同は歓聲をあげてお喜びになりま
したさうですが。鳥村中尉殿は武州丸の指指官として燦沈後齋藤
大尉同然八名の部下と短艇の方針を誤まりて三晝夜餘り漂流の後

ち齋藤大尉よりも後らに此島に漕ぎつけられ、仁川丸の短艇が二
隻あるのを発見して二名宛は其ボートに乗り移り三方に分れて海
岸を漕ぎ巡ぐり一行の行衛を探して居られたと云ふ事わかり一同
萬歳を叫びました。

其間に夜も明けてやがて山田兵曹から漸く人家を発見したから
直ぐ来たられよと云ふ報告に、一同驅けつけて唐黍園子に豚の畑
煮も三日振りなれば舌鼓をウツて腹力をつけられ。又たソコの部
落には大阪に七年から住んで居たと云ふ支那人が居て言葉も自由
自在に通辯することが出来るので、一行は此チャンの爲めに非常
の便宜を得て一艘の戎船迄かり切りにし、其日の夜に入りてから
齋藤大尉、南澤大機關士、鳥村中尉を始めとし、一行は日本艦隊
最後の根拠地ルーパー指して御出發に相成りました。
斯くて翌廿六日の午後には一行無事假根拠地に到着なされ非常の
歓迎を受けられましたさうですが。夫等は管々敷故省き第一回旅

順開塞の巻は之れにて芽出度大團圓に致し升。

新編 日露戰爭談(第二編)終

明治三十九年六月十日印刷
明治三十九年六月十五日發行

定價金四拾錢

著者 有所
日露戰爭談 第二編

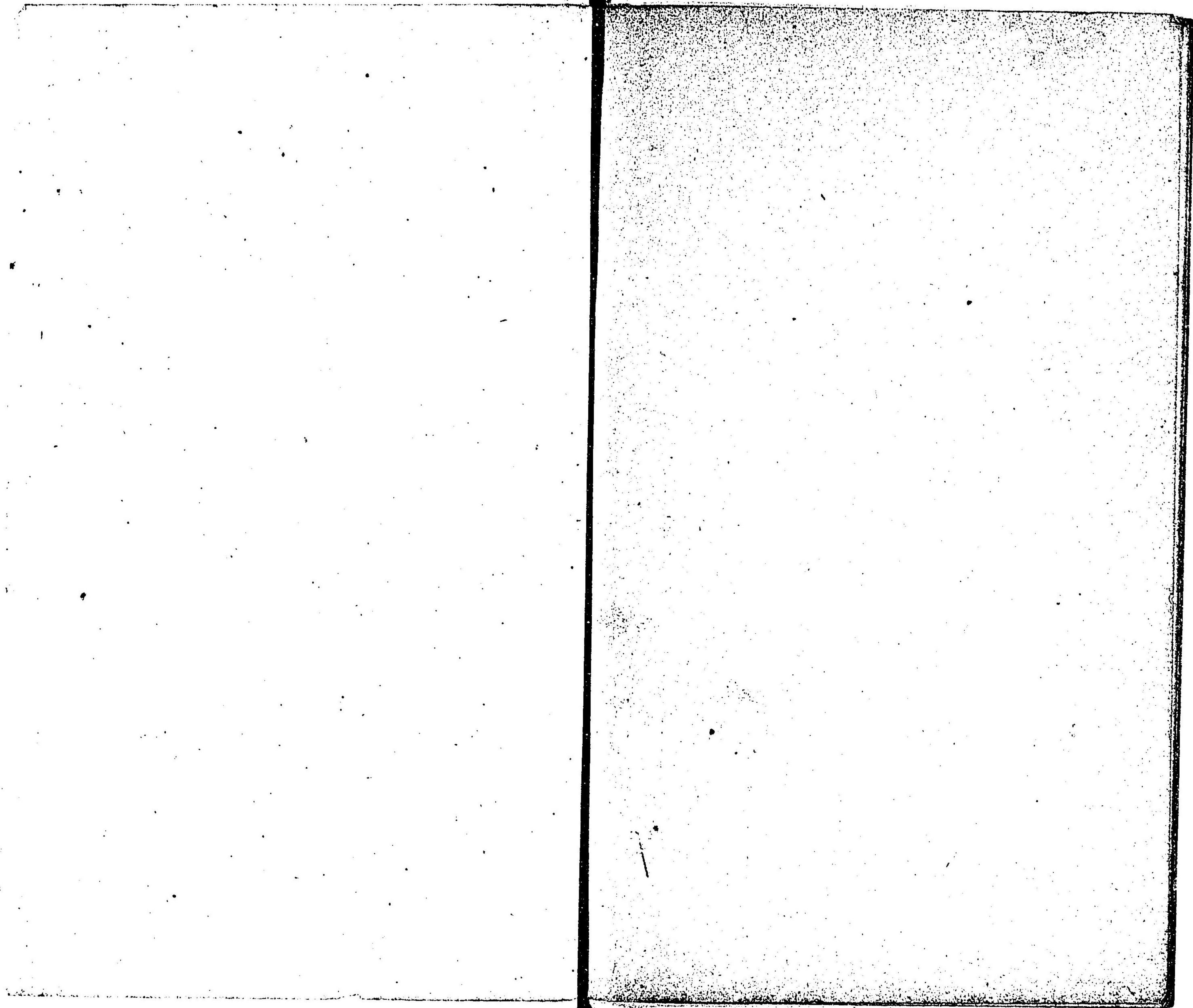
著者 美 當 一 調
發行者 此 村 庄 助
印刷者 大 阪 市 南 區 益 町 通 貳 丁 目 四 拾 壹 番 邸 吉 村 源 次 郎
印刷所 大 阪 市 南 區 安 堂 寺 橋 通 二 丁 目 二 十 六 番 邸 山 田 元 吉

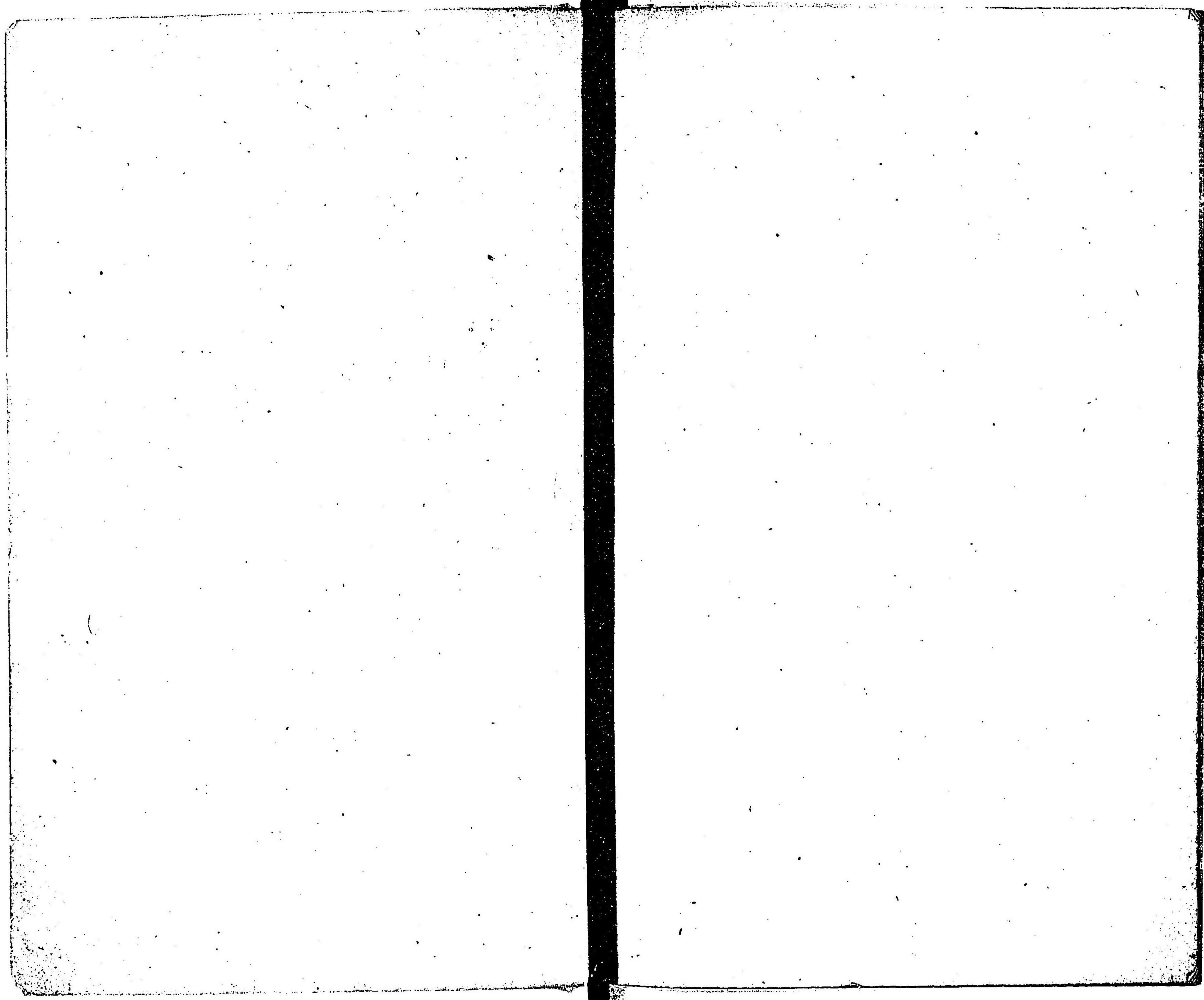
發行書肆

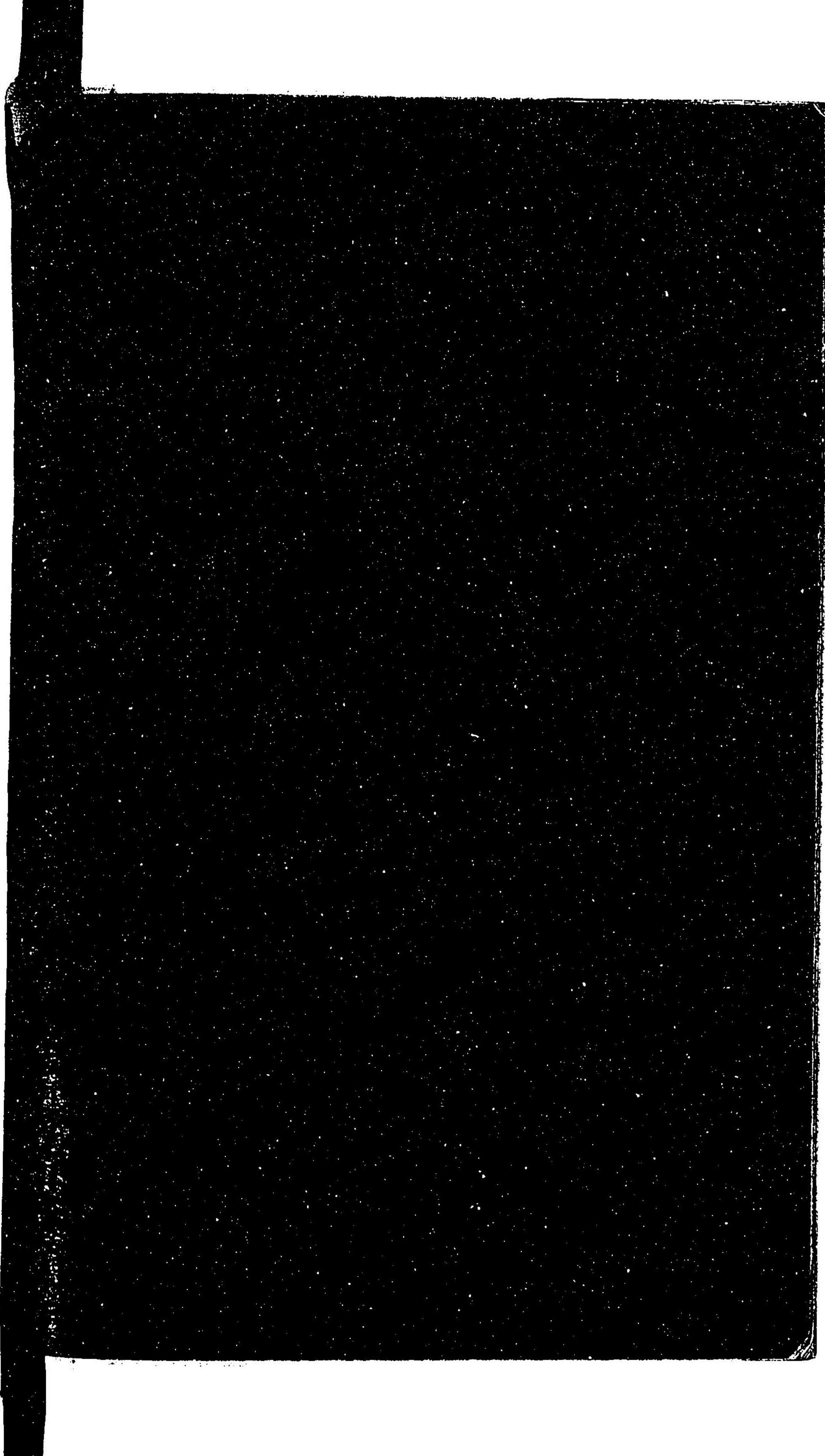
大 阪 市 南 區 心 齋 橋 通 順 慶 町 北 八 入

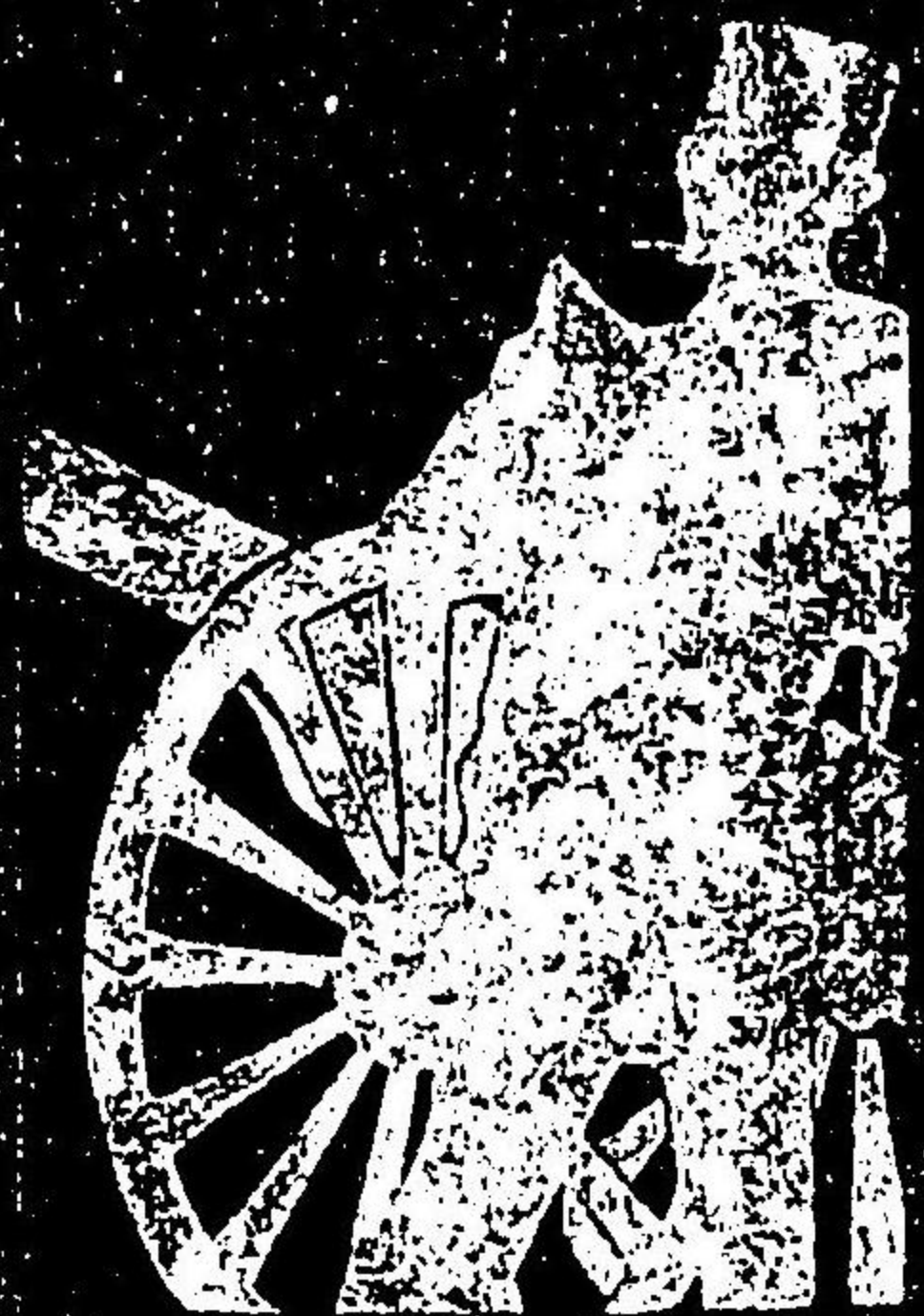
此 村 欽 英 堂

〔電話東二六八六番〕









251
162

